

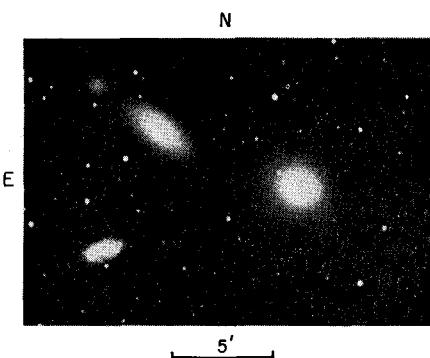
銀河めぐり [V]

NGC 3379

NGC 3379 は E1 型橢円銀河で、しし座にある M96 銀河群のメンバーと考えられている。顕著な三連系（物理的相互作用については不明）を形成している以外には、とりたてて何の変哲もないこの銀河が、実は測光「業界」では誰知らぬ人もないほど有名を馳せているのである。

1961年バーカレーの第11回IAU総会で、コミッショナ 28（銀河）中に、「銀河の測光・分光測光」ワーキンググループが設置された。このワーキンググループの主要な目標の一つは、いくつかの「標準銀河」を定めて、その精密な光度分布を確立することであった。その標準銀河の筆頭に挙げられたのがこの NGC 3379 である（他に M87, NGC 3115 など）。

以来 NGC 3379 の光度分布はワーキンググループメンバーを中心に精力的に観測測定され、これまでの結果を集大成した論文が昨年出版された。これには、中心核を通る東西方向（x軸）に沿って、17.019 等/平方秒（ $x=0^{\circ}037$ ）から 27.830 等/平方秒（ $x=438^{\circ}90$ ）まで 153



測光の標準銀河 NGC 3379。左上は NGC 3384 (SBO 型), 左下は NGC 3389 (ScIII 型)。東京天文台木曾観測所 105 cm シュミット望遠鏡にて撮影。

点の光度が示されている。またこの光度分布を最も良く表現するものとして、ガウス分布に従う中心核（半径 $\leq 12''$; 全光度の 4% を占める）と $r^{1/4}$ -法則に従う本体を重ね合せた二成分モデルが提唱されている。このモデルの残差は上記約 11 等の広範囲に亘って ± 0.1 等以内であるが、残差が規則正しい周期性をもっていることは、橢円銀河中に副次的な微細構造があることを示すものかも知れない。

この銀河の表面測光を報告した論文は 12 以上、積分等級の観測値を掲載した論文は 15 以上と、まさに標準銀河の名にふさわしい。しかし、前記ワーキンググループの最新の回報は、この銀河を含めた標準銀河のさらに多くの観測データの出版を呼びかけている。

NGC 3379 の諸元は次の通りである。赤経 = $10^{\text{h}}45^{\text{m}}$, 赤緯 = $+12^{\circ}51'$, 距離 = 8.0 Mpc ($1' = 2.33 \text{ Kpc}$), 25 等/平方秒での直径 = $6'00$, 見かけの B 等級 = $10^{\text{m}}224$.

(岡村定矩)

◇ 5月の天文暦 ◇

日 時	記 事	
5 18	立 夏	(太陽黄経 45°)
8 6	下 弦	
9 12	金 星	最大光度
12 22	月	最近
13 18	水 星	外合
14 14	天王星	衝
14 21	朔	
21 7	小 満	(太陽黄経 60°)
22 4	上 弦	
23 16	土 星	留
24 20	月	最遠
25 4	金 星	留
30 6	望	

